

# 歴史を振り返り 匠の技 いまに伝える

守口市には、京都から大阪を結ぶ全長約27キロの「文禄堤」※1という京街道がありました。堤として残っているのは守口市の約70メートルのみで（7ページ地図参照）、全国でも貴重

な歴史遺産となっています。また「守口宿」※2が整備され今年で40年になるといわれています。この堤の地で昔と今を生きる人々に、スポットをあてました。



川東提灯店 川東善弘さん

江戸の昔からの建物で、守口宿当時のままで商いを続けている川東善弘さんは、川東提灯店の3代目になります。

提灯は、電気のない時代、旅人はいうまでもなく、生活に密着した必需品でした。現在では主に祭りや冠婚葬祭、選挙などで使われています。

“ええ仕事やな”そう思った善弘さんは、もともと字を書くことが好きだったといいます。

“微力な私を支えてくださっている皆さんに感謝すると共に、この技術が続いてほしい！”と話してくださいました。

また、小さいころから善弘さんの姿をずっと見ていた娘の綾子さん。“この技術が無くなるのが寂しい。古い家なので不便な所もありますが、愛着があるので残せる所は残していきたい”そう思い、4代目を目指し、現在修行中です。

今までの文禄堤を支え続けた善弘さん、これからの文禄堤を支える人となるであろう綾子さん。歴史とともに伝統技術を傳承されていく事は、守口市の誇りといえます。



4代目 川東綾子さん



屋根には「鍾馗」という像が2体、魔除けとして上がっています。これは中国の伝説上の疫病神を払う神。一般的な「鍾馗」は立ち姿のものが多いですが、邪鬼を踏みつけている「鍾馗」は大変珍しいものです。



下から文禄堤を見た風景



文禄堤

※文禄堤※1）豊臣秀吉は、大坂城に次いで文禄3年（1594年）に伏見城を築城し、伏見と大坂を最短距離で、多雨量時にも使える道路が必要になり、淀川の堤（文禄堤）を造り、その上に街道（京街道）を通しました。それまでは、淀川を利用するか、伏見から八幡まで舟で行ったあとに東高野街道（京都府と和歌山県高野山から奈良街道（京都府）奈良息や古堤街道（大阪府）奈良原生駒市を通り、大坂へ入っていました。また、京街道は軍事用道路でもあり、敵の侵入を防ぐために堤防を切り、大坂を湖のようにする目的も考えていました。

## 49年越しによみがえる 御主人の願い、家族とつながる



BUNROKU (文禄堤薩摩英国館) 館長・田中京子さん



文禄堤を歩くと立ち寄りたくなる店に出会います。この家に生まれ23年間この地（守口市文禄堤）に住み、49年間鹿兒島の知覧町に在住していた田中京子さん。現在は、守口市と知覧町を往復する生活をして

います。それは、文禄堤の宝を守るためです。

文禄堤の宿場当時の建物を大正15年に改築。その町家を、平成27年4月から改装し始めました。きっかけになったのは生前、常に「ここを空家にしないで、家の中に風を通してほしい」と話していた御主人の言葉と想いがあったからです。娘が4人に、孫が12人。改装には子どもたちが携わりまし

た。今年、孫の一人は関西の大学に入学し、この家から通っています。

米屋、酒屋と代々商家系であり、田中さんも平成27年10月に生まれ育った地で商売（紅茶専門店・BUNROKU（文禄堤薩摩英国館））を始めました。

「次の世代にも残したい想いで、この文禄堤に歴史を残しつつ、新しいことができたこととても嬉しいです。文禄堤がますますにぎわうことを願っています」

御主人の想い、そして田中さんの想いとが重なり、家族とともに守ったこの家に、再び風が通り歴史がつながった瞬間でした。

- ①外観は当時のままで、2階が低い「逗子二階」造り。2階にある虫籠窓や卯建が特徴。
- ▽虫籠窓…外から見ると虫籠に似ており、火災や防犯のためでもありました。
- ▽卯建…防火や隣家との目隠しや雨よけの袖壁。
- ②当時からある中庭。昔は間口が狭く奥行きが広いため明かりが入らず、明かり取りの役割となっていました。庭にある灯籠なども、当時からのものです。
- ③大正15年に酒屋を始める際に、米田本店（大阪・船場にあった酒問屋）から母柱を譲り受けたもの。明治時代から大阪の街を見てきた木が、今もこの家を支えています。
- ④当時からある文禄井戸。店内で見ることができ、堤防の下まである深さが文禄堤の特徴を感じさせてくれます（420年経過）。



守口の歴史を伝えながら新しいものへ開発は進む

「守口市の特産品を作りたい。どこにもない守口の紅茶を作りたい」田中さんの想いは続いており、自家農園で無農薬栽培した紅茶と守口の木「くすのき」をブレンドしたもので試験的に作成。香りが上品で、ほっと気持ちを落ち着かせてくれる香りがあります。

また、守口大根の葉っぱを使ったベーグルに挑戦し、試行錯誤する毎日を送っています。新しい風が文禄堤に吹いています。今後の活躍に期待しています。



2階は、地域の文化サロン（交流の場）として運営しています。



守口宿の原画（国立博物館所蔵）文化年間（1801年）～1817年の守口縮図

※わかりやすくするために、原画に色を加え地名を記入しました。 ※守口門真歴史街道推進協議会「守口宿歴史マップ」より引用